

里海カンファレンス 2021 in 南三陸

～里海里山ひとつながりのマンダラに学ぶ～



開催日時 : 2021年11月6日(土) 10:00～17:30

会場 : 南三陸ホテル観洋

主催 : 特定非営利活動法人里海づくり研究会議
一般社団法人サステナビリティセンター

共催 : 公益財団法人国際エメックスセンター

後援 : 南三陸町・宮城県・JFみやぎ志津川支所

- プログラム -

10:00 OPENING

- 歓迎のあいさつ 南三陸町副町長 最知明広氏
- はじめに

10:10 SESSION 1 いのちめぐる里海里山・震災復興の10年を振り返る ～学びの宝庫となった里海・里山～

- 奇跡の1/3革命 ～こども達に誇れる養殖再生～
- FSC 認証がもたらしたもの ～スタバの内装も彩る南三陸杉～
- 地域想いのおいしいお米・めぐりん米 ～生ゴミバケツで資源循環～
- 親子で学ぶサステナブルな里海里山 ～南三陸FW がもたらす学び～
- 総合討論

～休憩～

13:00 SESSION 2 里海と生物多様性 ～研究者との出会いが生み出す里海の可能性～

- ラムサール条約事務局もビックリ！驚きの生物多様性
～生き物宝箱・志津川湾～
- 市民が守った八幡川河口で干潟調査 ～こんな生き物でちゃいました～
- 日本一の魚類相・柏島 ～島丸ごとミュージアムを掲げて歩んだ20年～
- 天気予報のように生態系を予報する未来 ～里海の価値を守る仕組みづくり～
- 総合討論

～休憩～

15:30 SESSION 3 今、里海に迫る危機 ～里海の未来に向けて～

- 地球温暖化・海洋酸性化が脅かす海の環境
- 三陸海域における酸性化と貧酸素化の現状
- 総合討論 海の異変にどう立ち向かうのか？ ～私たちに出来ること～

17:00 CLOSING

- 南三陸学会設立宣言
- 次期開催地から
- 総評

17:30 閉会宣言

総合司会 浮ヶ谷 美穂 氏 (うきがやみほ)

ミヤギテレビ報道制作局 エグゼクティブアナウンサー
千葉県出身 1991年ミヤギテレビ入社。すぐに釣り番組リポーターとして宮城の海の豊かさを知る。95年～宮城の夕方情報番組「OH バンデス」のMCをさとう宗幸さんとのコンビで、立ち上げから約25年務める。2019年から「ミヤギ news every」キャスター。現在は月～水担当。趣味はダイビング。震災前の南三陸や女川でのダイビング経験あり。



SESSION 1 いのちめぐる里海里山・震災復興の10年を振り返る
～学びの宝庫となった里海・里山～

○奇跡の1/3革命 ～こども達に誇れる養殖再生～

後藤 清広 氏 戸倉カキ部会長

阿部 民子 氏 たみこの海パック代表

震災前は県内でも最低の評価だった戸倉地区のカキ養殖が、いかにして日本最高賞である天王杯を授与されるに至ったのか？奇跡の1/3革命により実現した一番の成果とは何だったのか、実際に携わった漁業者から、地域の実情を赤裸々にお話し頂きます。



○FSC 認証がもたらしたもの ～スタバの内装も彩る南三陸杉～

佐藤 太一 氏 南三陸森林管理協議会



東日本大震災の津波でまちの財産は流出したが、山には政宗公も認めた南三陸杉が残っていた。この山の価値を高め、次の代にもつなげていける林業を目指して取り組んだ環境認証取得が生み出したものとは何か？どんな方法で地域を巻き込んでいったのか？仕掛け人が証言する里山づくりの物語です。

○地域想いのおいしいお米・めぐりん米 ～生ゴミバケツで資源循環～

阿部 勝善 氏 めぐりん米生産者

野添 幹雄 氏 アミタホールディングス株式会社

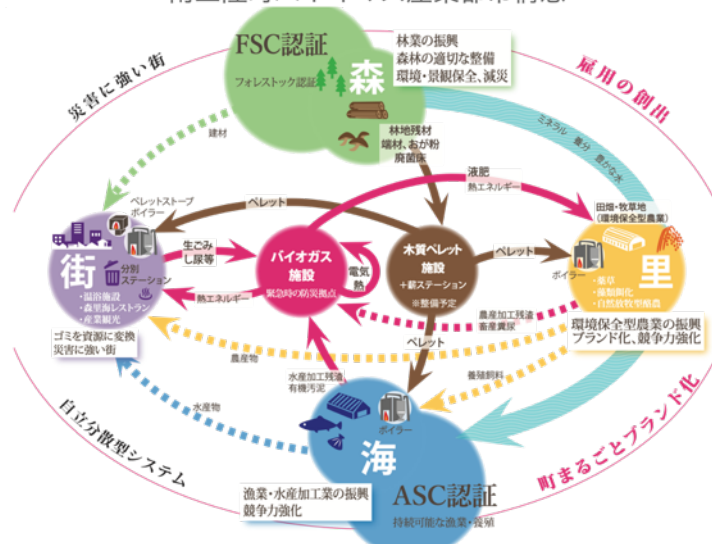
佐藤 克哉 氏 有限会社山藤運輸

工藤 真弓 氏 上山八幡宮・かもめの虹色会議

海・山をつなぐ里の循環インフラとして、今や地域のシンボルとも言える南三陸 BIO。住民参加の生ゴミ循環の取り組みが動き出すまでは、まさに綱渡りの連続でした。得体の知れない液肥を使おうと決意した農家、使い勝手のよくない液肥普及のため、高価な液肥散布車やトラクターまで購入して循環の輪を支える運送業者、こども達への紙芝居をつうじて「いのちめぐる」ことの大切さを伝える神主。課題をものともせず進んでいるように見える地域の推進力はいかにして生まれるのか、当事者との対話を通して探ります。



南三陸町バイオマス産業都市構想



○親子で学ぶサステイナブルな里海里山 ～南三陸FWがもたらす学び～

宮田 新作 氏 早稲田実業学校初等部

本校で2015年から実施している「いのちめぐるまち南三陸フィールドワーク」についてご紹介します。

小学生と保護者が同じプログラムを受講しながら、南三陸町の自然や社会の姿を学びます。この地が持つ自然環境はもちろん、そこに住む多彩なスタッフが提供する質の高い実習が魅力です。都会では体験できない、机上では得られない「生きた学び」。本フィールドワークを通して、次代を担う小学生の学びについて考えます。

たかが夏休みの親子実習とあなどるなかれ。盛りだくさんの3泊4日。南三陸を通して未来が見える、なんて大風呂敷を広げていますが、参加者は自分なりの答えを見つけて東京に帰っているようです。

気がつけば南三陸ファン急増中！



総合討論

コーディネーター 太齋 彰浩 氏 (一社) サステイナビリティセンター

- 里海・里山の好循環からはじまる「持続可能な社会実現」に向けたヒントを、みなさんと共有できたらと思います。

SESSION 2 里海と生物多様性

～研究者との出会いが生み出す里海の可能性～

○ラムサール条約事務局もビックリ！驚きの生物多様性 ～生き物宝箱・志津川湾～ 阿部 拓三 氏 南三陸町自然環境活用センター

寒流と暖流がバランスよく混ざり合う独特の物理環境を背景に、志津川湾には多種多様な動植物が生息しています。200種を超える海藻群が海の森をつくり、砂地には絶滅危惧種のタチアマモなど海草類の草原が広がります。ラムサール条約湿地登録をきっかけに改めて見直された志津川湾の多様な価値をご紹介します。



○市民が守った八幡川河口で干潟調査 ～こんな生き物でちゃいました～ 宮城県志津川高等学校 自然科学部

地域の自然保護や震災後の復興を目指す町作りの取組みとして、南三陸町の全面的なご協力のもと、松原海岸や八幡川の生物調査を継続的に行っています。震災から生態系の復活を確認できる貴重な場所であり、復旧工事による人為的な環境改変の状況をとらえることで、多くの人たちにこの調査の重要性を伝えていきたいです。



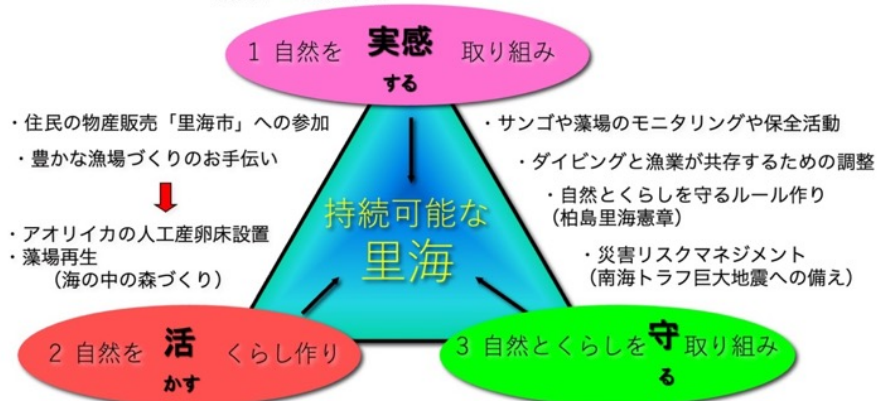
○日本一の魚類相・柏島 ～島丸ごとミュージアムを掲げて歩んだ 20 年～
 神田 優 氏 NPO 法人黒潮実感センター

四国西南端に位置する周囲 3.9km の小さな島柏島。その周辺海域にはその数日本一の 1,150 種以上の魚類の生息が確認されています。柏島の海の特徴は、その種多様性のみならず魚と人との距離感が極めて近いことです。昔から漁業で生計を立ててきた柏島ですが、潜っていても魚が人を怖じません。これは人と魚との関係が良好なことの証と考え、この島を人と海洋生物が共存する海、すなわち「里海」と名付けたのが 1998 年。私たちは柏島を“島が丸ごと博物館”と捉え、豊かな自然と人の暮らし全てを「生きた教材」とし、海のフィールドミュージアムとしての活動を続けてきました。今回はフィールドミュージアムとして柏島で取り組んできた活動の一部をお話しします。



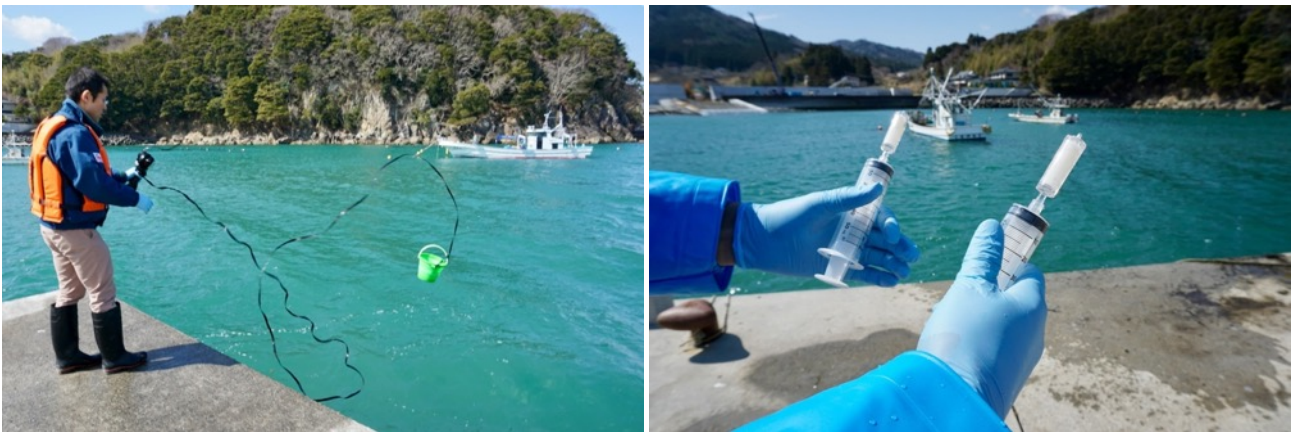
島全体を丸ごと博物館に
 自然環境+人々の暮らし

- ・海洋生物の調査研究（大学等との共同研究）
- ・里海セミナーの実施（高知大学にて柏島学開講等）
- ・海の環境学習会や体験実感学習、エコツアーの開催
- ・島内外への情報発信



○天気予報のように生態系を予報する未来 ～里海の価値を守る仕組みづくり～
近藤 倫生 氏 環境DNA学会・東北大学

自然にはたくさんの種類の生物種が一緒に暮らし、私たち人間の生活を支えてくれています。個々の生物種の個体数は時々刻々と変動していますが、生態系全体としては一定のバランスが保たれているようにも見えます。私たちが自然とうまく付き合っていくためには、この生物の変動や安定性を理解したいところですが、それは簡単なことではありません。なぜなら生物の間には互いの個体数に影響し合う関係やつながりが存在しており、そこから生み出される変動がとても複雑になるからです。この講演では、環境DNAという「バケツ一杯の水」だけから生物を調査する最新の手法を使うことで、この生物の複雑な変動にどう迫れるか最近の研究をもとにご紹介します。



○総合討論

コーディネーター 柳 哲雄 氏 九州大学名誉教授

- 地域密着型の研究者がいることで実現できることや、研究者と市民の協働が生み出すより良い未来の姿について、みなさんと深めていきたいと思います。

SESSION 3 今、里海に迫る危機 ～里海の未来に向けて～

○地球温暖化・海洋酸性化が脅かす海の環境

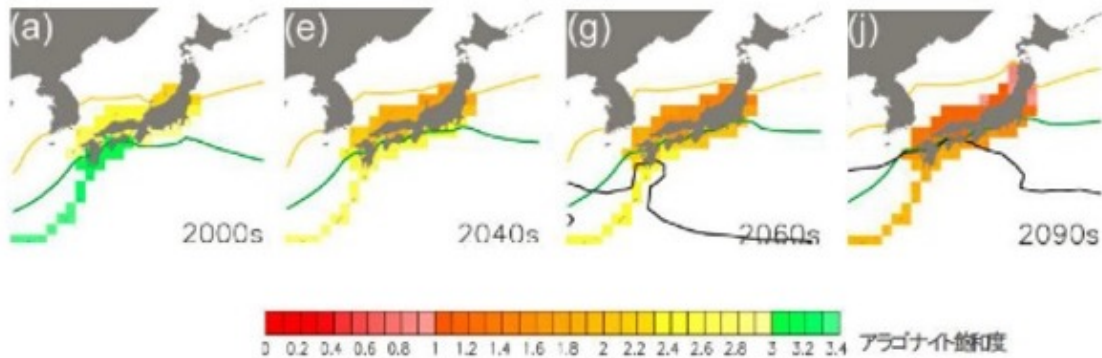
藤井 賢彦 氏 北海道大学

8月に公表された国連気候変動に関する政府間パネル(IPCC)の第6次評価報告書では、「人間の影響が大気、海洋及び陸域を温暖化させてきたことには疑う余地がない」ことが、具体的な根拠と共に示されました。人間活動にともなうCO₂の排出は、地球温暖化と海洋酸性化を引き起こします。地球温暖化が人々の注目を集めているのに比べて、私たちが日々の暮らしでは実感できない海洋酸性化への社会的関心はまだ薄いですが、地球温暖化同様、海洋酸性化も確実に進行しています。また、地球温暖化と海洋酸性化が重なり合うと海の生き物に対する影響がさらに深刻になることも分かってきました。この講演では、CO₂排出がもたらす、この2つの現象が日本近海の生き物や私たちの暮らしに及ぼす影響について、最新の研究成果も紹介しつつ、お話しします。

(参考)日本沿岸のサンゴ礁は消失すると予測されている

- 日本沿岸のサンゴ礁の分布域に関する将来予測では、分布域は北上するものの、同時に、白化現象の増加域とサンゴ骨格の形成に適さない酸性化域に挟まれる形となる
- 結果として、日本沿岸の熱帯・亜熱帯サンゴ礁の分布域は、2020～30年代に半減し、2030～40年代には消失すると予測されている

(日本の気候変動とその影響(2012年版))



IPCC第5次評価報告書に引用された、
日本沿岸のサンゴ生息域の予測結果
(Yara, Vogt, Fujii *et al.*, 2012,
Biogeosciences)

○三陸海域における酸性化と貧酸素化の現状

小莖 恒夫 氏 水産研究・教育機構

酸性化や貧酸素化の影響は三陸海域にも及んで来つつありますが、実は沿岸域の pH や酸素濃度は、もともと温暖化以外のさまざまな人為的要因（水質汚染や港湾の建設など）によっても変動しています。特に三陸の海は複雑な地形を反映して、湾ごとに pH や酸素の変動パターンも、その変動要因も大きく異なるため、個々の湾で起きている変化とその原因をよく観察して、対応を考えていく必要があります。

この公演では宮古湾と志津川湾を中心に、三陸海域における酸性化と貧酸素化の現状と今後の行く末、また各湾の環境を維持していくための方策についてお話しさせていただきます。



総合討論 温暖化・酸性化にどう立ち向かうのか？

～私たちに出来ること～

コーディネーター 田中 丈裕 氏 NPO 法人里海づくり研究会議

コメンテーター 鷲尾 圭司 氏 もと水産大学校 理事長

明石海峡において海苔養殖漁場の調査を 30 数年続けている。養殖ノリの生育と海水の pH は関連しており、明石海峡では通常 pH7.5-8.5 の間で変化しており、雨が多く陸水の影響が強いと pH7 台となり、ノリ養殖漁場でノリの生育が活発になると pH8.5 を超えることもある。海洋酸性化を考えるとときには陸水の影響と藻類など植物の生育状況を考慮する必要があるだろう。

- 人間活動が招いた海の危機に、私たち自身がどのように対処していったら良いのか、みなさんと共有したいと思います。

CLOSING

○南三陸学会設立宣言

発起人代表 佐藤 太一 氏

○次期開催地から

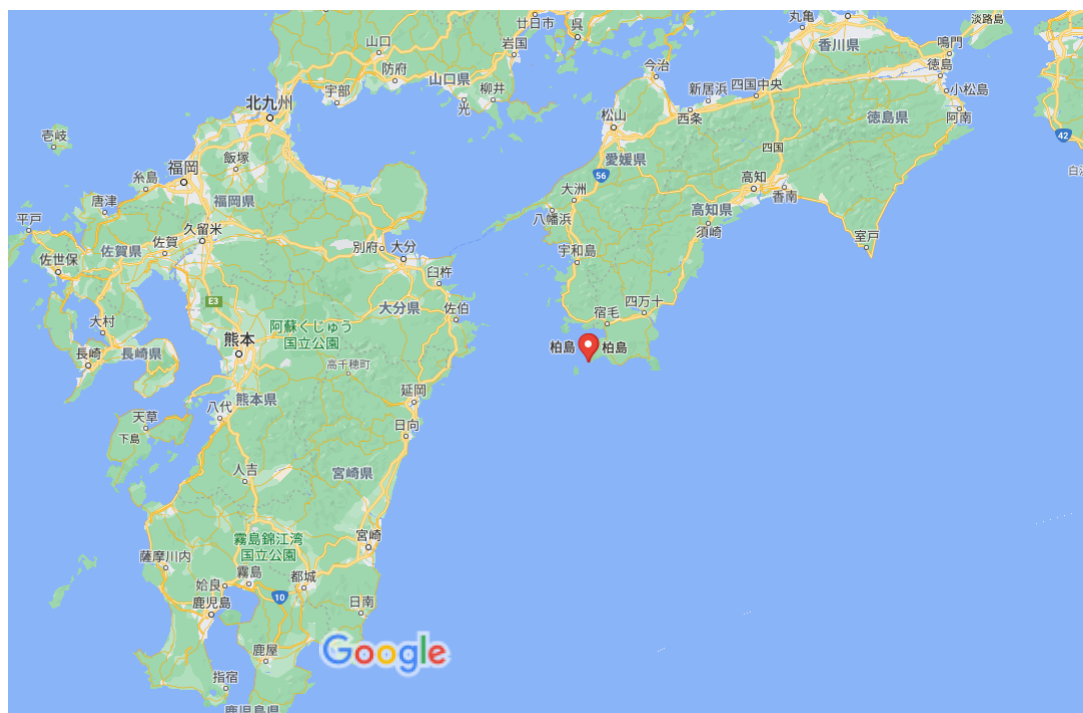
神田 優 氏 NPO 法人黒潮実感センター

○総評

松田 治 氏 NPO 法人里海づくり研究会議

○閉会宣言

春名 克彦 氏 (公財) 国際エメックスセンター



地図データ ©2021 SK telecom、Google 50 km



次回は高知でお会い
しましょう！

出演者一覧

歓迎のあいさつ

最知 明広（さいちあきひろ） 南三陸町副町長

南三陸町歌津出身。保険福祉課長などを歴任し、平成 27 年より現職。地元名足地区の外洋性の海から聞こえる波の音で目を覚まし、田束山を眺めては今日の天気を観る。毎朝 1 時間のウォーキング・ランニングが日課。剣道 7 段



はじめに

太齋 彰浩（だざいあきひろ）（一社）サステナビリティセンター 代表理事



民間機関の研究者を経て、フィールド密着型の教育を志し、2000 年に南三陸へ移住。箱もの施設再生により、年間数千人の交流人口創出。東日本大震災後は、町職員として壊滅した水産業の復興に奔走するとともに「循環型でレジリエントなまちづくり」を目指した、南三陸町バイオマス産業都市構想の実現に貢献。2018 年 4 月より現職。「森里海ひと いのちめぐるまち」の実現を目指す。

SESSION 1 いのちめぐる里海里山・震災復興の 10 を振り返る ～学びの宝庫となった里海・里山～

後藤 清広（ごとうきよひろ） 宮城県漁業協同組合 志津川支所 戸倉出張所 カキ部会長。1960 年生まれ、南三陸町戸倉地区出身・在住。柔らかなリーダーシップでカキ養殖の 1 / 3 革命を主導し、後継者に誇れる海を取り戻した。日本初の「ASC 養殖場認証」取得にも貢献。これらの取り組みが認められ、戸倉地区のカキ養殖は令和元年度農林水産祭天皇杯を受賞した。



阿部 民子（あべたみこ） たみこの海パック代表



山形県米沢市出身。戸倉の漁師と結婚して、三人の子どもを育てながらカキ・ワカメなどの養殖漁業に従事。震災で漁業設備や自宅を失い、海はもう見たくもないと思ったこともあったが、それでも海とともに生きることを決意。一念発起して通販事業を起業。地域の海産物の良さを伝えるワークショップ・紙芝居などで、ファンの心をつかんでいる。

佐藤 太一（さとうたいいち） （株）佐久専務取締役 理学博士
山形大学大学院にて宇宙放射線の研究に取り組んでいたが、震災後、家業を継ぐため 2012 年に南三陸町に帰郷。2015 年に「南三陸森林管理協議会」を設立し、同年 10 月には宮城県初の FSC 認証を取得。その後、公共施設では国内初となる南三陸町新庁舎の FSC 全体プロジェクト認証や宮城県発の FSC 木材流通づくりに貢献。南三陸林業の可能性を探索し続ける。DJ・オカルト研究が趣味。



阿部 勝善（あべかつよし） 楽農家



南三陸入谷地区で農業に従事。自らを「楽農家」と称し、ササニシキの無農薬栽培や液肥を活用した循環型農業など、日々、農の可能性追求に余念が無い。地域の知恵袋的存在として、液肥を使った栽培法を広め、液肥栽培米は「めぐりん米」として商標登録された。今年の新米はさんさん商店街のさんさん市場、入谷サン直売所で好評発売中。

野添 幹生（のぞえみきお） アミタホールディングス（株）
植物の葉緑体 DNA 研究で学位取得、製薬会社で開発業務に従事後、アミタグループに合流。南三陸 BIO の生ゴミ回収率改善のため、生ゴミ分別チラシ制作や回収バケツ常設などに携わる。現在は志津川高校でエコシステムクラブを創設するなど、教育分野から社会を変える取り組みに注力。



佐藤 克哉（さとうかつや） （有）山藤運輸代表取締役。



家業にやりがいを感じられずにいたが、震災を機に様々な出会いを経て、自社の存在意義を再認識する。ゴミの運搬が減ることから、商売敵となるようなバイオガス事業にも、その取り組みに共感して参画を決意。液肥運搬・散布を担うことで、いまでは山藤運輸は地域の農家に感謝される存在となっている。社内改革にも積極的で、地域未来牽引企業（経済産業省）に選出。南三陸町総合戦略推進委員、南三陸町産業審議会委員

工藤 真弓（くどう まゆみ） 上山八幡宮禰宜

神職を掌る家系の 3 姉妹の末っ子として生を受ける。元々家業を継ぐつもりはなかったが、実家に戻ったのをキッカケに神主に。紙芝居でいのちめぐるまちの取り組みをこども達に発信。カモメの虹色会議を主宰するなど、天性のファシリテーターとして住民主体のまちづくりを主導。多くの協力者を巻き込みながら、対立ではなく対話をつうじて、松原海岸防潮堤のセットバックを実現させた。



宮田 新作（みやたしんさく） 早稲田実業学校初等部教諭
 大学での専攻は生態学、環境科学。高校の教員を経て2010年に現在の
 小学校に赴任。高学年の理科を担当。
 理科教師は科学と子供を結ぶ最高の科学コミュニケーターであるとの
 考えのもと、科学を身近に感じられる教材作りに頭をひねりながら教
 壇に立っています。休日は自宅ベランダの片隅で燻製作り。料理は科
 学！



SESSION 2 里海と生物多様性
 ～研究者との出会いが生み出す里海の可能性～

阿部 拓三（あべたくぞう） 南三陸町自然環境活用センター任期付研究員



北海道で海洋生態学を学んだ後、南三陸町自然環境活用センター、北海
 道大学水産学部練習船での勤務を経て再び南三陸町で研究・教育に携わ
 っています。専門はお魚の生態研究ですが、志津川湾のラムサール条約
 湿地登録以降、藻場や干潟、貝の研究・教育活動が主になりました。志
 津川高校自然科学部と一緒に松原海岸の調査も実施中。最近は5歳の息
 子も干潟の生きもの観察にハマっています。

宮城県志津川高等学校 自然科学部

今年度自然科学部は3年生2名、2年生7名で活動
 中。生き物に興味のある部員たちの集まりです。調査
 の後は、顧問の千葉奈津先生の指導の下、各種大会や
 発表会に向けて準備を行っています。



★受賞歴

令和2年度 第9回エコワングランプリ最終審査会 【文部科学大臣賞】

令和3年度 マリンチャレンジプログラム北海道・東北大会 【優秀賞】

第21回 環境甲子園 【特別奨励賞】

神田 優（かんだ まさる） NPO 法人黒潮実感センター長・高知大学客員准教授



1966年高知市生まれ。東京大学大学院博士課程修了。農学博士。専門
 は魚類生態学。学生時代は釣りと高知県柏島・沖縄県座間味島でのダ
 イビングガイドで生計を立てつつ学問に励む。潜水時間7000時間以
 上。
 1998年に四国の西南端、高知県柏島に“島が丸ごと博物館”という構想
 の元、移住。持続可能な里海づくりに挑戦している。趣味は料理と魚
 の手づかみ。

近藤 倫生（こんどうみちお） 環境 DNA 学会会長 東北大学教授
「自然のバランス」やたくさんの種類の生物が共存できる仕組みについて研究しています。最近では環境 DNA などを使って得られる「生態系ビッグデータ」を使った研究に興味があります。関西から東北に引っ越してきて4年目になります。魚釣りが好きでよく出かけますが、いつまで経っても上手になりません。



柳 哲雄（やなぎてつお） 九州大学名誉教授 愛媛大学客員教授 NPO 法人瀬戸内海研究会議理事長 NPO 法人里海づくり研究会議副理事長 1972年京都大学理学部卒業、1974年同大学修士課程地球物理学専攻修了、1974年愛媛大学工学部海洋工学科助手、以後、講師・助教授・教授を経て、1997年九州大学応用力学研究所教授、2013年同大学名誉教授、2014-2018年（公財）国際エメックスセンター特別研究員、現在に至る。専門は沿岸海洋学、主著に「沿岸海洋学—海の中でのものはどう動くか」（1989年）、「里海創生論」（2011年）（以上、恒星社厚生閣）。



SESSION 3 今、里海に迫る危機 ～里海の未来に向けて～

藤井 賢彦（ふじいまさひこ） 北海道大学 大学院地球環境科学研究科 准教授 別府温泉地球博物館 Onsen アカデミックアドバイザー 横浜市出身。九州大学理学部地球惑星科学科卒、北海道大学大学院地球環境科学研究科博士後期課程修了。博士（地球環境科学）。国立環境研究所、米国メイン州立大学海洋科学部などを経て、2011年より現職。専門は環境科学・海洋学。潜水士、温泉マイスター。趣味は旅行、読書、ダイビング、水泳、ジョギング、温泉、飲酒など。



小埜 恒夫（おのつねお） 水産研究・教育機構 水産資源研究所 海洋環境部 寒流第一グループ 主幹研究員
茨城県出身。北海道大学水産学部卒業。博士（水産学） 地球温暖化等の長期的な環境変化が海洋生態系に与える影響を研究している。大学卒業後そのまま20年以上北海道で勤務していたため、なまる時は北海道弁。
趣味は旅行・ドライブ。好物はゆべし。



田中 丈裕（たなかふみたけ） NPO 法人里海づくり研究会議
理事・事務局長 高知大学大学院農学研究科栽培漁業学専攻修士課
程を修了。1979 年岡山県入庁。水産技師として、水産行政全般、
漁場環境整備、栽培漁業及び資源管理、複合型海洋牧場、アマモ場
再生、カキ殻など二枚貝の貝殻を利用した沿岸環境修復、ノリ色落
ち対策に関する技術開発などを企画担当。2008～2011 年に水産課
長。岡山県を退職後、海洋建設（株）水産環境研究所長を務めた
後、2012 年 1 月に“里海”の提唱者である柳哲雄氏、松田治氏らと
ともに NPO 法人里海づくり研究会議を設立、現在に至る。みなと
まちづくりマイスター（（一社）WF）、地域活性化伝道師（内閣府）



鷺尾 圭司（わしおけいじ）



もと水産大学校理事長 林崎漁業協同組合顧問 日本伝統食品研究
会会長 NPO 法人里海づくり研究会議理事
京都市出身。漁協職員や大学教授、水産大学校代表などの立場か
ら、瀬戸内海の明石海峡を中心に海の環境と漁業問題に関わる。イ
カナゴのくぎ煮や海苔の恵方巻の普及を通じて地域食文化と水産業
界の在り方を探求。海や水産に消費者参加型の取り組みをはかるべ
く、水産人材育成や里海活動に参画。

CLOSING

松田 治（まつだおさむ） NPO 法人里海づくり研究会議理事長
広島大学名誉教授 瀬戸内海など閉鎖性海域の課題に 50 年以上取
組んでいます。フィールドワークが大好きで、北極、南極や熱帯の
海域、ヒマラヤやアラスカでも多くの視点を得ました。各地の里海
づくりに関わっていますが、里山づくりの森林ボランティアも続け
ています。大震災後の「海遍路」では、野宿自炊しながらシーカヤ
ックで三陸の小さな漁村を海から訪ねました。



春名 克彦（はるなかつひこ）（公財）国際エメックスセンター専務理事



1983 年に兵庫県に入庁し、その後、兵庫県温暖化対策課長、兵庫県環
境整備課長、兵庫県水大気課長、兵庫県環境管理局長を経て、2019 年
より現職。我が国及び海外における閉鎖性海域の環境保全に関する連携
強化を図るため、人的・知的ネットワークの有効活用を図り、市民や研
究者等とともに「多様な自然と人間が共生する持続可能な社会」の実現
に尽力している。

主催・共催団体紹介

NPO 法人 里海づくり研究会議

NPO 法人 里海づくり研究会議は、真に豊かな海を取り戻すために活動を続けてきた研究者・技術者ら同志が集い、2012年1月12日に設立登記された研究活動組織です。その目的は、漁業現場や関連業界、行政上の現実的な課題・問題の解決のため、個々のテーマに応じて様々な分野の研究者・技術者を参集し、海に関わる現場と学会を結びつけ、学際的かつ業際的、実務的・実践的な調査研究により、沿岸環境と人間社会が共存する「里海づくり」を目指すことにあります。メンバーの多くは、長年に亘って漁師さん達とともにアマモ場再生に関する研究や実践活動に取り組んできました。近年は、これら里海づくりを活用して小中高校生らを対象とした学校教育、都市部の市民等を対象とした社会教育など海洋教育に注力するとともに、「里海と里山と“まち”をつなぐ」をテーマに、人と“もの”の交流促進を目指して活動しています。



アマモ場に産み付けられたコウイカの卵



市民によるアマモ場再生活動



中学生たちによるアマモ流れ藻回収



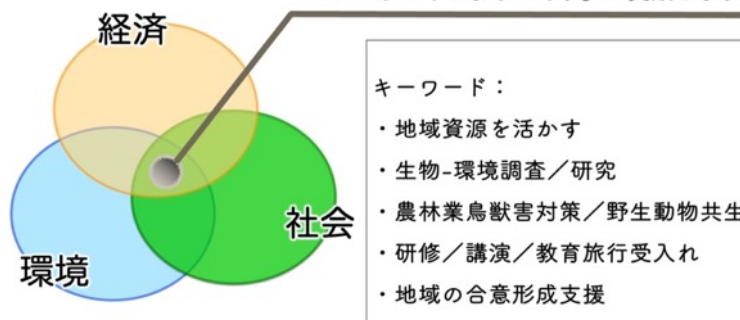
2021年9月27日に備前市日生にオープンした海洋教育研究施設“ひなせうみラボ”



一般社団法人 サステナビリティセンター



環境・社会・経済にまたがる課題解決で
「いのちめぐるまちづくり」に貢献します





公益財団法人 国際エメックスセンター

International Center for Environmental Management of Enclosed Coastal Seas

国際エメックスセンターは、瀬戸内海、チェサピーク湾(米国)、バルト海(北ヨーロッパ)、地中海(南ヨーロッパ)など世界の閉鎖性海域の環境保全の問題を解決するために、研究・政策・市民活動・教育・産業活動の幅広い分野で、沿岸海域のみならずその集水域も含めたエリアを対象に、国際的に総合的な交流を行うことを目的として作られた組織です。

センターの名称は、閉鎖性海域の環境管理を意味するEnvironmental Management of Enclosed Coastal Seasの頭文字EMECSから取ったものです。この組織は、第1回世界閉鎖性海域環境保全会議(第1回EMECS、1990年8月神戸市)、第2回EMECS(1993年米国ボルティモア市)を経て1994年神戸市に設立され、2000年に財団法人(外務省・環境省共管)となりました。さらに、2012年3月1日に公益財団法人へ移行いたしました。



公益財団法人国際エメックスセンター
〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1丁目5-2 人と防災未来センター東館5F
E-MAIL secret@emecs.or.jp HP <https://www.emecs.or.jp/>



■youtube ライブ配信 URL


<https://youtu.be/OWDQOR85JvU>

■～アンケートご協力のお願～

今後の里海づくり活動に役立てるため、以下のアンケートへのご協力をお願いいたします。

<https://forms.gle/LpZPwxXCjEz5UwBE8>





発行・制作：一般社団法人サステナビリティセンター
宮城県本吉郡南三陸町志津川廻館 69-15
<https://m-sustainable.org/>

志津川湾のタチアマモ (*Zostera caulescens*)